



號九十三第 月二十年五十四和 日十月二十年五十四和 行發日五十月一年一第 錢五金六部一(共)定年本 錢拾六金(共)報人 一才 田杉 一ノ七西座銀區馬京珠 社信通盟同

# 大政翼賛運動に就て

古野 伊之助

支那事變勃發當初、國內において政黨が分立して居たのでは事變を完全に遂行し得ないといふので政黨を合同し、舉國體制を作らねばならぬといふ考へから、新黨運動が頻りに唱導された。しかしそれはただ漠然と議會における政黨の勢力を二にするといふ考方であつたそのうちにいつともなく新政治體制といふ言葉が出て来たこれは多分單に政黨だけを一緒にしたのみでは駄目で、何か新しい政治體制を作つてこれに非常に積極的な政治力を持たせなければならぬといふ考へからさうなつたのだと思ふ。さらに單なる政治體制の轉換だけでは駄目で、經濟、文化、國民生活、教育等あらゆる分野における國民體制の轉換を、世界の大勢並に時代の趨勢は要求し出したのである。そこで最近新體制、新體制といふ言葉が使はれ、新體制準備委員會が出来、この運動をどういふ名で乗り出さうかといふことになつて、大政翼賛運動といふものが發足して来たのである。

大政翼賛運動、即ち新體制運動

新體制即ち大政翼賛運動といふ形になつて来たことは、靜かに世界の情勢を考へ、日本の過去の歴史に將來の方向を眺めるとき、誠に意義深いものがあると思ふ。そこで世界の大勢と時代の要求は一體何を日本に求めてゐるかを考へるに、いふ迄もなほ舉國一致の體制を作り、世界の現狀を打破するといふ役目に他ならないのである。では日本の舉國一致體制を如何にして作るかを考へるに、どうして今迄わが國が歩いて来た道を振り返つて見なければならぬ。明治維新以來、藩閥打破とか官僚打破が行はれ、階級闘争等が盛んにあつたが、これらはすべて歐米の政治思想乃至は原理をそのまゝ、直輸入して近代日本を作りあげて来た結果だと思ふ。かうした行き方を今後とも辿つて行くとするれば、多分フランス、イギリス或はアメリカの跡を追つて行くことになりはしまいか。しかし一旦現狀打破の陣營に投じた以上はどうしても國家のあらゆる力を一點に集中する極めて明確な國家目的を確立し

如何に轉換すべきか

日本がこれから作つて行かうとする新體制と、過去の藩閥制間における意、識や觀念が間断なく矛盾を來し、衝突してゐる。日本の新體制は大政翼賛體制といふ形でなければならず、大政翼賛運動は大政翼賛の巨道を實踐することに他ならないのだといふことを如何に強調しても、今迄自由主義、資本主義、個人主義的な意識に深く捉はれて居た一般の民衆の氣持といふものは、一朝一夕にして振り替へることが出来ないことが多い。しかし大政翼賛の實踐こそが日本獨特の方那無比の體制の土臺となるのであると思ふ。

如何に轉換すべきか

我々の任務

我々は恰度鐵道線路の旗振りの役目をつとめてゐるのだ日本民族の行くべき道をはつきり見守り乍ら、始終赤旗を振つたり、白旗を振つたりして日本國民の發展して行く方向を誤らしめないやうにするのが我々の仕事である。同盟の同志諸君は宜しくこの日本の新しい體制を充分認識して、日本の大轉換の本質を把握して貰ひたいと思ふ。わが新體制の本質は今迄歐米諸國から直輸入した考へ方では斷じて認識し得ない。どこ迄も皇室を中心とし奉つて一億の國民が奉仕の觀念として協力の體制に移らなければならぬのである。かくて初めて永久に確固不動の民族團結體制が生れて来るのである。地方を歩いて見ると、今迄政治家連仲が地方を遊説するのに民政黨のものは政友會の政策を崩倒するとか、或は革新派の人達は年寄

これは又實に心強い日本の底力であつて、かくてこそはじめて新體制が期し得られるのである。我々もこれから自ら反省し、批判して互に鍛錬し、練磨し、以て同盟國人としての職責を果し、國家の重要機關としての任務を遂行しなければならぬ。さて最後に最近御承知の通り社會部次長をしてゐた山本忍介君を亡くし非常に惜しいことをしと思つてゐるので、それについて一言つけ加へて置きたい。山本君は同僚の間にも、先輩の間にも信頼厚く、仕事に熱心な人で、結局仕事のために斃れてしまつたのである。私はただ山本君の死を悼むだけではないと思ふので、山本君が社のために犠牲になつて斃れたといふことから、我々は何らかの教訓を擲んで山本忍介君の魂を我々同志社員の中に生かして行かなければならぬと思ふ。それに付けても仕事のために非常に熱心に働くことは大事なことではあるが、そのために生命を捨てたのでは折角同盟建設のために用ひるべき優秀な力をそれだけ殺ぐことになるので諸君は各人夫々十分健康に留意して頂きたい。山本君の斃れたのを機會に今後各人それらの立場において自分の健康に注意すること、社會體としてこれから社員全部の健康保持のために更に一層の注意と努力を拂つて行くといふ教訓を獲得しなければならぬと思ふのである。(十一月二日の社長講話)

は國民全體の態度がすべてこの様になつた場合にはじめて出来上るのであつて、誰かがお膳立て運動してくれんことを俟つべきものでは斷じてない。ドイツやイタリアのやうにある獨裁者が出て、それに國民がでは追隨して行くやうなものなのである。この頃地方を歩いて見て私は益々わが同盟が日本國民全體に對して擔つてゐる責任の重大さを痛感するのである。この時局に直面して本當に國民に時局の實體を認識させるといふ仕事の大部分は我々が擔つてゐる任務である。我々は恰度鐵道線路の旗振りの役目をつとめてゐるのだ日本民族の行くべき道をはつきり見守り乍ら、始終赤旗を振つたり、白旗を振つたりして日本國民の發展して行く方向を誤らしめないやうにするのが我々の仕事である。同盟の同志諸君は宜しくこの日本の新しい體制を充分認識して、日本の大轉換の本質を把握して貰ひたいと思ふ。わが新體制の本質は今迄歐米諸國から直輸入した考へ方では斷じて認識し得ない。どこ迄も皇室を中心とし奉つて一億の國民が奉仕の觀念として協力の體制に移らなければならぬのである。かくて初めて永久に確固不動の民族團結體制が生れて来るのである。地方を歩いて見ると、今迄政治家連仲が地方を遊説するの民政黨のものは政友會の政策を崩倒するとか、或は革新派の人達は年寄

# 式典に参列して

社會部長

栗林農夫 謹記

十一月十日、一億の民草、邊土の末までも擧つて皇國のみ業へを響きまつる佳き日、宮城前に舉行された曠古の盛儀、紀元二千六百

年式典に私は特に許されて参列するの光榮に浴した。よべの月、こ

ともさやかに照りわたつてゐたが、果して早天紅く、はち切れるやうな秋氣である。青雲たなびく

大内山お露の水しづかに松を映して蒼古の色をたへ、式場への

参入口、奉祝塔下兩側の花壇の小菊白に、黄に、露霜をふくんで色鮮らしい。うちつとく参列者に交つて式場に入ればこれは何んといふ大式典場であらう。祝出門から馬場前門から坂下門から城のやうに参入する人々の流れは忽ち場内を埋めて午前十時、たゞ見る顔、願……

はす黄白色塗りの丸柱が靜かに支へ、張りめぐらされた紫の幔帳はとところへ、赤緋の紐に絞られて、白く染め抜いた菊花御紋章が豊かにふくらんでゐる。前庭に立ち飾られた万歳飾、日月旗は右に、左にゆらめいて、銀色の鉾は秋陽をあつめ、式殿色の屋根に映へてきらりに輝いてゐる。式殿上を

て、臨御間もなしと思へば身のうち引きしまつて、あたりに人なき思ひながら、うち見れば五万の参列者同じ思ひに結集して、兩上にはらんくんと太陽が輝くばかり、ふと見ればわが卓の前に秋を借しかつ蜻蛉が二つ、しづかに翅をやすめてゐる。いま兩陛下式場便殿に御着の刻である。やがて出御を告げる聲に容を正せば、式殿の奥清楚な御洋装に拜する皇座階下、つづいて御軍裝に御眼鏡光ると拜する天皇陛下うち揃はれて玉座御座につて波うち「臣等協心戮力、誓つ

の途なりとも、われら、いざゆかれは正に十一時二十五分。再び階下に下つた近衛首相は正面マイクをロフオンの前に立つて容を正すと見るや一聲高く「天皇陛下万歳」と双手をあげて發聲した。今こそ叫べ、天をも衝け、わが大君の御まへ、赤旗をしばつて唱へまつる「万歳」怒聲となつて三度ひびくのである。かくて盛儀は終つた。兩陛下入御のあと、なほ太陽一つ輝いて十萬の参列者たゞ酔へるが如くわれもまた仰いで皇恩のふかきを思ひ、伏して今日の光榮に熱し、この感激、とわに忘れじ事に移してゆめ踐みたがふまじと心に誓ふのであつた。

## 秋光佳日

農夫

滿天の星曉光となりゐて口嗽ぐ  
むらさきにはふ天垂らし松も式典ある場  
われら大君とありいま秋空をゆたけくも  
遠き皇祖の現し御聲と頭を垂りぬ  
萬歳のごめき波ゆく方に秋樹立つ

ああ、東から、西から、南から北から、はては海を越へて全國津々浦々はもとより海外まで祖國の盛典に胸ときめかし、誇りをつつてはるる、と來つる同胞である。まことその顔はけふの光榮と感激に輝いてげにや民草、赤誠もゆる大平原である。式場正面には大内山の縁をうしろに紫宸殿を徳ぶ腰殿造りの典雅な式殿、杉皮葺の屋根は美しい曲線を描き、麗らかな秋陽に陽炎うて白木造りと思

拜すればほのかに光る金屏風の前錦きらめく卓子掛に覆はれた御机二つ、やがて兩陛下の臨御を仰ぐ玉座と拜するも畏い。やがてこの殿上にも昇殿参列の顯官たちがしづくと整列、夫人たちも交つて華やかに美しく盛儀のほどを想はせる。擴聲機が間もなく出御を傳へると一同起立、肅然として音一つないしどまに宮居のあたりかすかに君が代のラッパが響い

だめ給ひの七上葉をまもつて列聖齊しく蒼生を和育したまひ、萬民また皇座を扶翼し奉つてよそぞれみ來りつる悠遠千六百年、いま皇統を嗣ぎたまふすめらぎの尊き御妻を吾等民草の前に現したまふ。おお、皇國日本の誇り、感極つて言ふべくを知らず。ここに五萬人の凝望は、まこと一億同胞の固き結晶、この誇り、この力、このみかどのみ前にこそいかなる苦難

大訓に率由し益々國體の精華を發揮して非常の時艱を克服し……と奏するあたり殊にも高きまことに一億國民の總意を披瀝して刺すことなく、われら耳にきき、心にくり返すのであつた。この時陛下には長くも勅語を賜ふた。玉音式段の奥より洩るゝを親しく拜し、ふかく頭を垂れてわれも人もたゞ感激の涙頬に傳はるを覺ゆるのみ畏さにいふべき言葉もない。時進

# 興津報道戦

西園寺公病ひ篤く、我が社が興津に特派員派遣と決定したのは、十一月十五日、山本次長逝去の悲しみの日であつた。お通夜の想出も慌しく、先鋒隊小田、小柳兩記者は十六日朝特急「關」で急遽東京を出發した。坐落莊前の民家軒並みにズラリと設けられた各社臨時支局には特派員通信動員を併せて夫夫十餘名を超ゆる多數が動員され、報道戦は早くも酷である。數においては寡少であるが、同盟陣においては寡少であるが、同盟陣は正體なる情報網擴大に着手々と手をつて行つた。十八日小田記者歸京、十九日齋藤、村上兩記者來興、この頃國公の情勢は次第、險惡となり物事騒然。

廿日夜、我社機自動車に到着した。長鬚指根の袖を越へ、東海道に社旗をはためかせて馳驅して來た新鋭部隊に握手の雨が濺がれる。同盟陣はこれで總動員聯絡員等を合して都合九名。數こそ劣れ、實においては遙に他社を凌いで意氣正に軒昂。

廿四日病狀更に悪化す。我が陣は正確なる情報と科學的斷断によつて「國公終に重體」の至急電を飛ばした。興津報道街は緊張の極に達して、些細の動きにも血走つた眼が交され、殺氣をへ標ふの

## ロンドン特派員

### 危く爆撃

我が社長谷川、皆藤兩ロンドン特派員は獨逸軍艦隊下にあらゆる苦難を冒して報道報國に邁進して去るが、最近の空襲は愈々物凄くむる十一月廿九日夜の如きは危く爆死する所だつたといふ電報を打つて來てゐる。即ち最近到底ロンドン市中に居られなくなつたため居を効外に移したところ、こゝにも廿九日夜獨逸機が襲來、隣家が木葉みちんとなり、漸く九死に一生を得たといふのである。我が社が世界に誇る獨逸英戦の記事は實にかうした苦難の下に報道されることを思ひ兩特派員に遙かに敬意を表するものである。

昭和十五年十一月廿五日、朝來

ナチス黨編 獨逸西部隊作戦

（六日西歐を敵寇の襲撃の解剖）  
（近出版部刊行の定案）

# 第一回岩永賞決定

岩永賞に關しては本社局長並に地方總支局長より提出された内申書に基き慎重審査を重ねた結果榮ある第一回岩永賞は中支總局勤務係原滋社員に授與することに決し、意義深き同盟創立の日たる十一月七日本社會議室において岩永賞授與式を舉行、古野社長より原滋社員(代理大岩東亞部長)に對し左の賞狀が授與された。

## 賞 狀

中支總局勤務社員  
篠原 滋

君は昭和十二年十二月支那事變前線從軍記者として大陸に特派され爾來今日に至るまで或は第一戰に或は作戰基地に在て報道の任に當り其間數次銃火の下に挺身して

だ世にたるものがあります。この感謝を終生胸底にしてこの榮譽を汚すことなく層一層不敏に纏つて職務に邁進致す覚悟であります。

# 寫眞全體會議

本社寫眞全體會議は十一月四日より三日間に亘つて本社會議室において開催。

出席者は本社側から古野社長、島山、上田、堀倉常務理事、石部總務局長以下各部長、參事。松本編輯局長、大平同次長、岡村同次長以下各部長、參事。齋藤通信局長、田村同次長以下各部長、參事。松本調査局長以下各部長、參事。地方側から中支總局、南京、北支、支小、南支、支小、大阪、各寫眞部長、福岡寺尾寫眞主任。國通側から砂田寫眞部長。

第一日は午前本社寫眞部長司會の下に開催。

- 一、皇國進歩
- 一、皇軍將兵に對する感謝
- 一、故岩永水賞の靈に對し
- 一、陣没從軍社員に對し

を行つたのち、古野社長、松本編輯局長の訓辭あり、終つて各支社寫眞部長の現地報告が行はれた。のち一旦休憩午後一時再開、本社各部より地方寫眞部に對する希望意見の開陳あつて第一日の日程を終る。

第二日は再び午前本社寫眞部長司會の下に開催、協議事項の議事に入る。

# 噫！山本社會部次長



本社社會部次長山本忍介氏は十月末來腹痛疾のため病臥して居ら

れたところ、十一月始め腹痛癒癒濃く一回愛顧してゐたところ、

二三日後より發病され十一月初頃より稍々重症の様に見受けられたので十一日入院、ときは、本人も極めて元氣で「電車で行きますか」など冗談を言つて居られた程であつたのに、入院數日にして突然重態に陥られ昏睡多く、御家族同僚必死の看護の中に、三十七才を一期として長逝された。

五日午後四時半永眠された。去る十月十七日の休日には、社會部の箱根方面清遊に参加されたが、そのときも、疲労の色が顔る

「餘りにも良心的な」神經を以てその弱體を酷使されたことも氏の命を短くした原因だつたであらう。周囲にあつて山本氏と仕事を共にした人たちの眼には、發病の前日一千日の日曜日に、デスクで鉛筆を握つたまま遂に卒倒されんとした姿が「殉職」といふ言葉そのものを見た様な記憶として残つてゐる。

葬儀は十八日午後一時より自家の自宅で行はれ、古野社長、松本編輯局長、吉川各日星支社長、栗林社會部長、社會部代表齋藤佳助君等の弔辭が獻げられた。

# 互助會報告 (十一月)

出 生	丸野 義雄(本社編輯局)第一女 依(神戸支社)第三子
見 舞	山本 忍介(本社社會部) 病氣 藤田 秀雄(鹿野支局) 夫人病氣 山下 健雄(岡山支局) 病氣見舞 福永 陽三(福岡支社) 同 杉江 武夫(大阪支社) 同 大島 慶一郎(同) 同 大西 保太郎(同) 同 淺野 重三郎(岡山支局) 長男病氣 板谷 幸太郎(本社總務局) 病氣見舞 松澤 賢(本社通信局) 同 吉村 榮吉(關支社) 同
結 婚	高野 茂男(本社編輯局) 長男 山本 康太郎(京都支局) 第三子 不動 健治(本社編輯局) 次男 山田 繁治(松山支局) 第三子 丸山 善作(京都支局) 第三子 瀧本 光三(釜山支局) 第一子 吳 仁 善(京城支局) 長女 千葉 秀雄(本社調查局) 第三子 (ホ) 専門的部面に關する細目の打合せ 等に關して活潑なる意見の交換あつて第二日を終了。 第三日は寫眞責任者のみの補足的懇談打合せが行はれた。
退 社	一、チャイナリストとしての寫眞班の地位 二、部員養成の方針 三、部員の實際的訓練 四、寫眞取扱の問題 五、新聞寫眞と報道寫眞の理論と實際 六、電送寫眞の配給處理 七、通信寫眞のサイズの原則問題 八、シリーズ物發行の企劃 九、新聞寫眞の研究 十、擴大プリンター製作の件 十一、超望遠寫眞製作の件 十二、勅題及新年原稿攝影に關する件 等に關して細目打合せを遂行して午後一時寫眞會議を終了した。
弔 慰	三浦 正樹(鹿兒島支局) 同 峰 虎十(小樽支局) 夫人病氣 明峰 嘉夫(政経部) 病氣見舞 矢野 勝一(福岡支局) 同 井島 民子(神戸支局) 同 相澤 四藏(橋本支局) 夫人病氣 高野 勇(青森支局) 病氣見舞 川島信太郎(北支總局) 病氣見舞 貞吉 武夫(關支社) 病氣見舞
入 營	權 泰善(京城支社) 實母死亡 佐野 博夫(經濟局) 同 田澤峰次郎(國語支局) 實父死亡 稻葉巳喜一(南支支局) 同 遠藤 七郎(地方部) 祖父死亡 山本 忍介(社會部) 本人死亡 原 房雄(徐州支局) 實父死亡 新井 正義(政経部) 同 要 保太郎(長野支局) 實母死亡 石井 薄(倉庫部) 實母死亡 佐藤 重雄(香港支局) 同

